

# ロージェへの違反 —力学的装飾による空間の拡張—

構造に任意の視覚的流動性を施すことで、建築の構成ヒエラルキーを書き換え、自由な領域を求める現代社会に適応する。



## 0. 背景

### 流れの体験



### 力学的装飾の必然性



ノートルダム大聖堂を訪れたときに感じた、力の流れによる身体の拡張性を、新しい空間のあり方として再構築したいと考えたのが、本設計のきっかけである。  
また、ピロティのような構造体のみで構成が津波のような自然の脅威に対して有効であると示されたが、ボリュームの底上げにより町との関係が希薄になることが予想されるため、構造の領域的側面の考察を行うことは必然的であり、本設計ではそれのみを取り上げ検証していくこととする。

## 1. 力の流れが表現された既存の建築をサンプリングし、流れの抽象化を行う。



## 2. 力の流れの効果と手法について考える

様々な既存の力の流れをプロットすることで、ふたつの流れの効果を探り出した。ひとつは流れによる開いであり、身体を空間隅々に拡張させる効果がある。もうひとつは力の流れの終点で発生する磁場(強い場所性)であり、人を引き付ける吸引力がある。このふたつを建築の原点と言われ、多用される4本柱の架構に着目し、装飾していく。

## 抽出したふたつの要素



ノートルダム大聖堂などに見られる流れの拡張性

サンタモニカ教会などに見られる流れの磁場



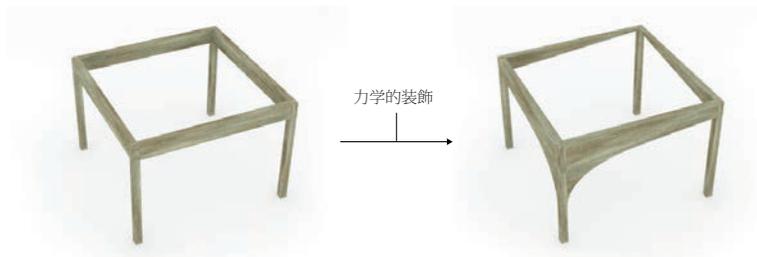
流れの開い



集約される力の磁場

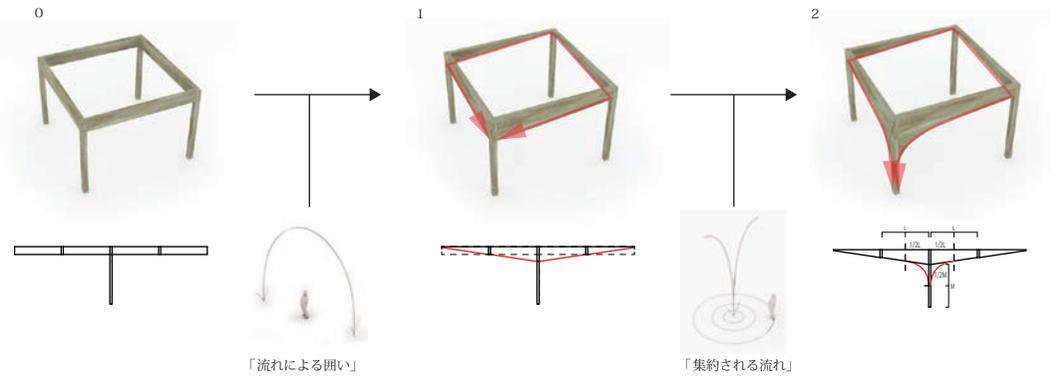
装飾の原点

ロージェへの違反



ロージェは過剰な装飾で創られた建築に対して異議を唱え、合理的な建築の姿を求めた。私はこれに対し、「力学的な表現=合理性」から、「力学的装飾=拡張性」に展開することでロージェからの違反を図った。先ほど述べたように4本柱の架構に流れを装飾的に付加する。この架構を流れの装飾の基本モデルとすることで、あらゆる建築形態に適用することを目指した。

装飾のプロセス



設計1 公園 —基本モデル—



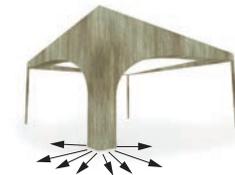
偏心架構を持つ性質

流れによる濃淡の説明



流れの開いにより、その場には流れによる領域性が生まれる。流れには始点と終点が存在し、その点の間が領域として定義される。そして、流れには方向性があるため、その領域にも方向性がある。始点方向に対しては空間が開けていくように見え、終点方向に対しては空間の定着感を感じることが出来る。空間を物体で認識するのではなく、流れによって認識されるのである。

磁場による空間の説明



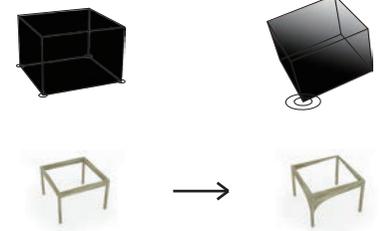
流れの終点に起きる磁場は人々を集める吸引媒体になる。ほぼ平面的に流れてくる力が左右から一本の柱に入り込み一気に地面まで伝う。その終点を中心に同心円状に磁場は広がり、流れの開いの外枠にまで磁場の領域性を生み出すことになる。磁場の強さは始点から終点までの長さ分の度合いをもち、その長さ分の垂直な柱が作り出す磁場と近似することができるのではないかと考えた。

流れと磁場の関係

磁場にはサンタモニカ教会の壇上の柱のような人を引き付ける力があり、この架構の入り口とも言える。その入り口から流れに従い意識が移動し、空間の輪郭が出現する。



生成される領域の質



生成される領域の範囲

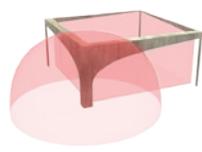
流れによる場所性



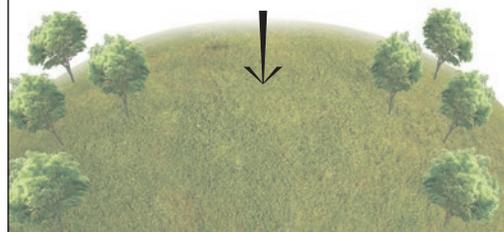
磁場による場所性



両方足した場所性



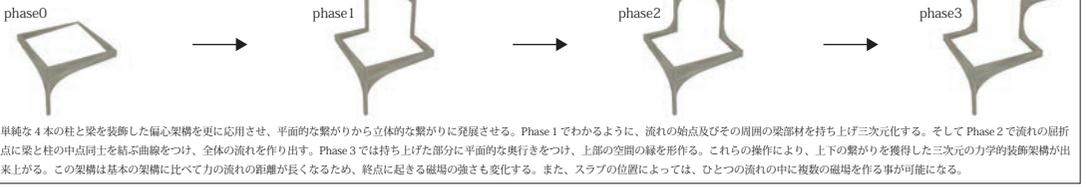
ベクトルで示すと、一点に強い荷重が加わるだけであり、木々のような定着感で広範囲の領域を作ることができる。



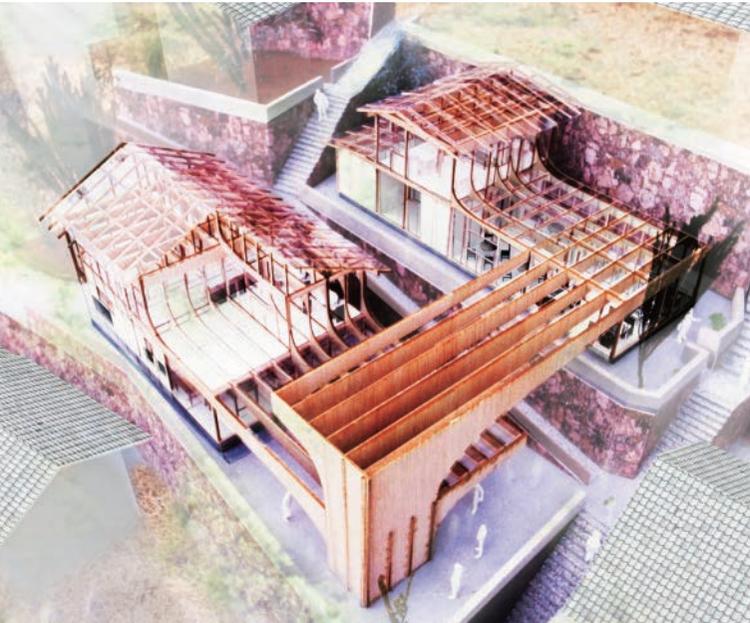
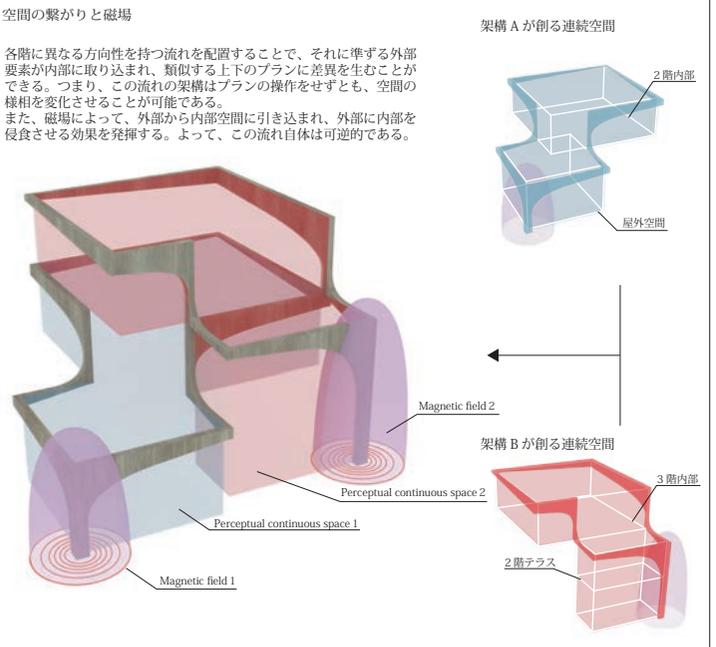
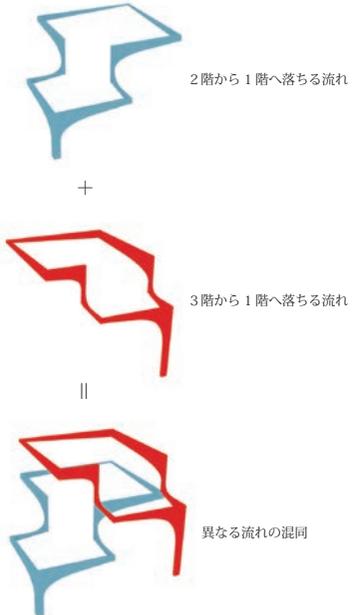


流れの3次元化ー知覚的連続空間の創出ー

力学的裝飾架構の3次元化プロセス



二種類の裝飾架構の組み合わせ



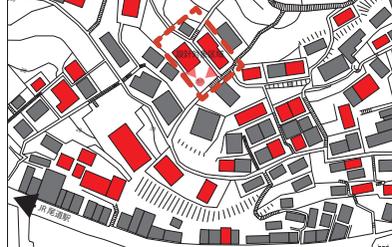
尾道の空き家問題

瀬戸内海のおだやかな海と山々に囲まれた街、尾道。尾道固有の町並みや建物はそこで営まれてきた暮らしの歴史であり文化である。現在、空洞化と高齢化が進み、空き家が数多く存在している。特に斜面地の地理的特殊性は住み難さの原因になっている。私はその地理的特殊性を利用して流れの裝飾により空き家のリノベーションを計画した。



敷地ー西土堂地域ー

敷地対象とした西土堂地域は傾斜が急なために展望が良い、古い建物が多く残っており、老朽化が進んでいる。個人所有地に空き家が集積しており、その付近の用地が手入れされずに荒れている箇所もあり、住環境再生には空き家活用と清掃等の地域の活動が必要になっている。

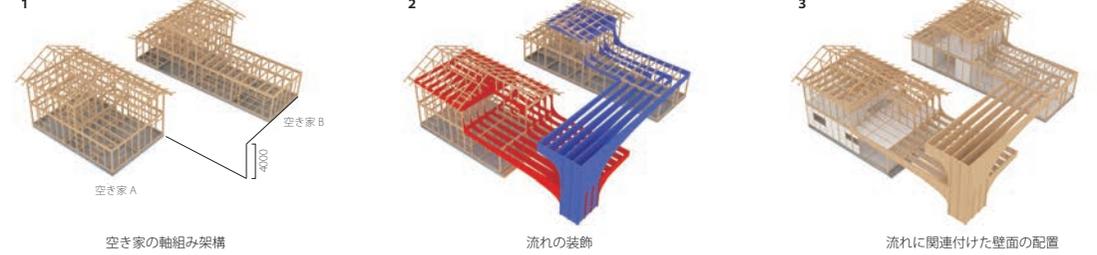


尾道空き家再生プロジェクトの本拠地として

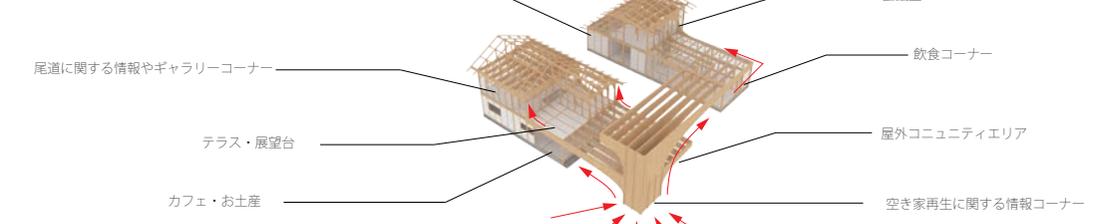
現在尾道の空き家問題に関しては、「尾道空き家再生プロジェクト」という活動がNPO法人の手で行われており、建築・環境・コミュニティ・観光・アートの五つを空き家に絡めることで空き家の再生を図っている。



空き家リノベーションの手順



各種プログラム



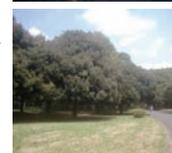


異なる流れの集合体

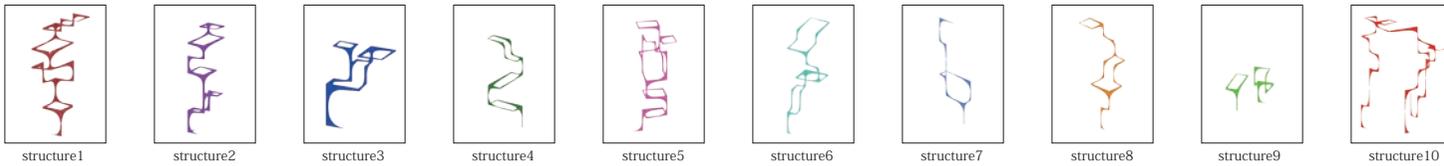
フェーズ3として、住宅で使用した三次元化された装飾架構のみを組み合わせて空間全体を創ることを試みた。設定は文化施設とし、敷地の代々木公園と連続性のある構成にする。各スラブ上ではガラスで仕切られた内部と、仕切りのない半外部空間が入り混じっているような構成である。それらの各空間を装飾架構がまがくように流れ、空間の混合性を助長している。上下に連続する装飾架構の入り組んだ組み合わせは外部から見たとき安定と不安定が入り混じったような感覚を与える。

Site

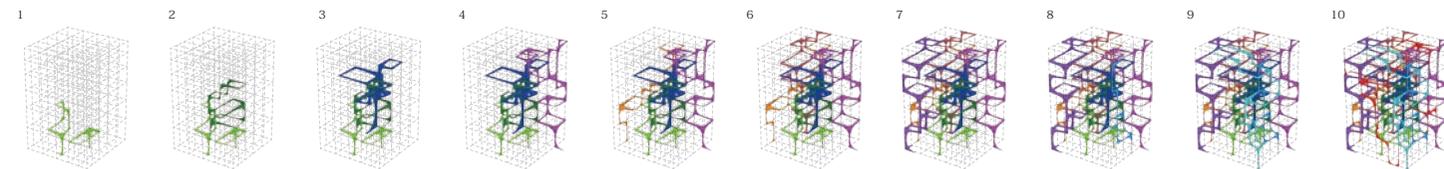
敷地は代々木公園の北西に位置する園内の交差点角地である。代々木公園駅から公園の中央広場までの道と、園内のサイクリングロードが交差する場所で、多くの人々が都市の喧騒から逃れ、自然の癒しを求めてやってくる。今回設計する文化施設は、構造の視覚的な流れと機能を有するスラブが兼ねることで、躯体全体が自然に溶け込むことを利用し、代々木公園との同化を図った。公園が立体化された建築である。



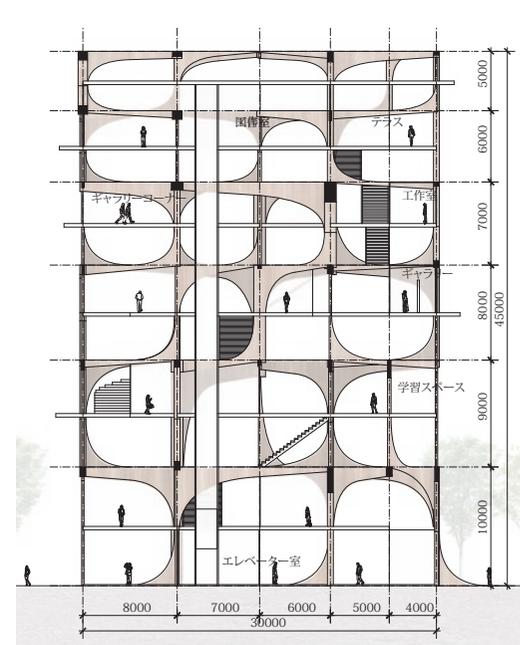
10種類の流れ



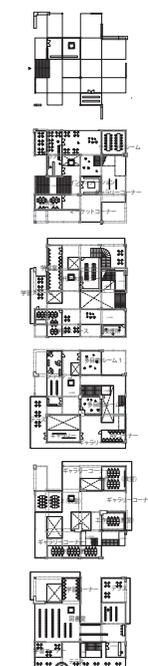
10種類の流れは、変則グリッドを基準に、構造的に不安定な10種類の流れが支えあうように配置する。



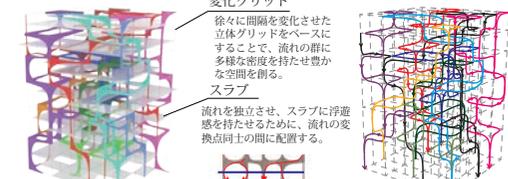
断面図



Plan

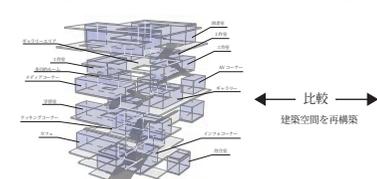


アクソメ



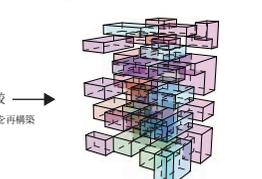
10種類の力学的装飾架構を変化グリッドに当てはめて配置し、互いに支えあうようにすることで、多様な流れが混同している空間を創る。

スラブと内部の関係



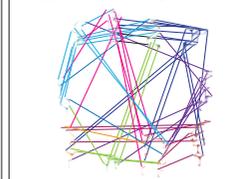
内部空間となるガラスで囲まれた空間は、主に調査・学習のための空間になっている。それ以外のスラブ上空間は半屋外である。

流れが生み出す領域



流れによって知覚される領域。左図のガラスで仕切られた物理的領域範囲とは異なるそれを示す。

10種類の流れの接続関係



各流れの部材断面はそれぞれ隣接する流れとの相対的な大小によってヒエラルキーが生じる。